

ポストコロナの ゼミナール運営テキスト

学習コミュニティ再創造に向けた『7つの問い』

ポストコロナ #大学生の日常 環境適応性
自己変容 自己発見

プロジェクトリーダー

豊田 義博

特任研究員



概要

専門ゼミナール(以下、ゼミ)は、これまでも大学での学びの集大成、知の技法の獲得、社会人基礎力の育成の場として期待されてきた。しかし、ポストコロナにおいては、失われた「#大学生の日常」を再創造する最後の砦として、「異質な他者」との深い交わりを通じた「自己変容・自己発見」の場となることが切望される。その場づくりに必要となる、学習コミュニティを再創造する要件を、『7つの問い』という形にまとめ、テキスト化した。

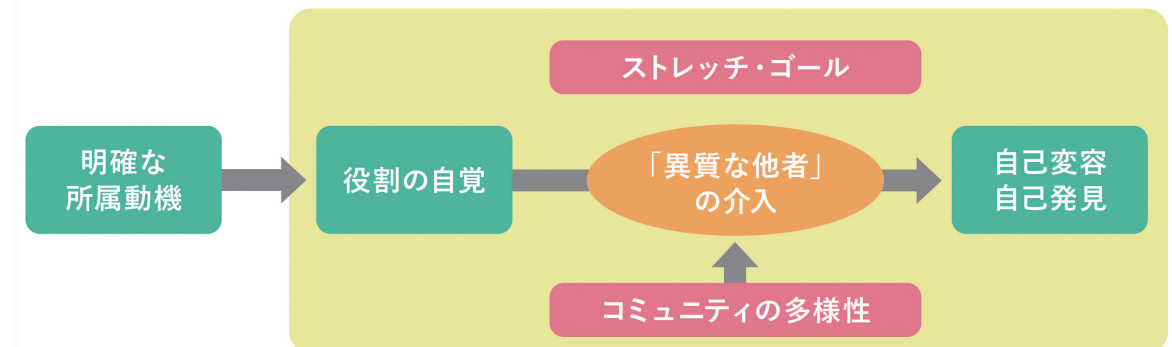
問題意識

コロナ禍は、日本の大学生に、とてつもないダメージをもたらした。キャンパスに足を運ぶことができなくなり、サークル活動もままならなくなった。「大学生の日常」は失われた。高校生までとは全く異なる広がりを見せる「豊かなつながりの宝庫」に、彼女ら彼女らは接することができなくなってしまったのだ。では、失ったものとは、具体的にはどのようなものなのか。コミュニティへの参加は、何をもたらしていたのか。

つながりの持つベース性、クエスティブ、つながりから得られる「安心」「喜び」「成長」「展望」というギフトを、ビフォーコロナの大学生は、どのように獲得していたのか。その探索をスタートした。また、どうすれば、その欠損を埋めることができるのか、という解決策については、コロナ禍の中でも機会が保たれている貴重なコミュニティであるゼミに注目した。

結論

自己変容・自己発見を生み出すコミュニティの要件



出所) Works Report 2021 『ポストコロナのゼミナール運営テキスト』

問題意識や仮説フレームに基づき、「#大学生の日常」調査を実施した。現在働いている20代後半の大卒者=ビフォーコロナの大学生を対象とした定量調査ならびにインタビュー調査である。

新たな発見は、大きく2つに集約される。ひとつは、大学とは、自己変容・自己発見の機会だ、ということだ。ビフォーコロナの大学生が大学生活から獲得していたのは「人との交わり方についての価値観の形成」「ものの考え方・ことへの接し方の変化」「志向・適性の自覚」に集約された。これは、人が社会・集団の中で生きていく上での基盤であり、かかわりの深いコミュニティでの経験を通してこうした態度形成=自己変容・自己発見が図られていたのだ。

もうひとつは、自己変容・自己発見をもたらすメカニズムである。①学生本人の中に、そのコミュニティに対する「明確な所属動機」が育まれている、②コミュニティで自分がどのように貢献していくかを意識した「役割の自覚」が芽生えている、③コミュニティ内に現状維持のままでは実現できないような「ストレッチ・ゴール」がある、④コミュニティ内に自分と異なる価値観やバックボーン、年齢等の「コミュニティの多様性」が存在する、という4つの要件が相互に影響を及ぼす中から、学生の姿勢・価値観に影響を与える「異質な他者との深い交わり」が生まれるのだ。

こうした発見を踏まえて、ゼミ(ポストコロナにおい

て最も重要な学習コミュニティ)を再創造するための『7つの問い』を導き出した。

- 【問い1】主体的な所属動機が育まれているか？
- 【問い2】ストレッチ・ゴールが設定されているか？
- 【問い3】学生それぞれの役割の発見や挑戦を生み出せているか？
- 【問い4】ゼミにかかわる人の多様性が創出されているか？
- 【問い5】「何でも話せる」安心・安全な場になっているか？
- 【問い6】目的に応じた最適な学習スタイルを選んでいるか？
- 【問い7】教員が相互に学び合う仕組みが創造されているか？

この『7つの問い』は、ゼミ以外のコミュニティにも広く適応可能なものだと考えられる。教育の場にとどまらず、新人・若手社員のオンボーディングなどへも活用されることを期待している。

Works Reportはこちら

ポストコロナの
ゼミナール運営テキスト

https://www.works-i.com/research/works-report/2021/semitext_k.html

